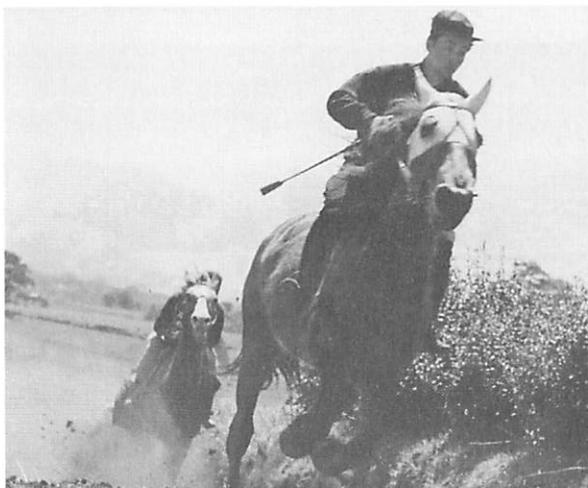


22. 草 競 馬

撮影：昭和29年 3 月



馬は農家にとって重要な働き手の一員でした。農耕にも、運搬にも馬の力を借りなければ農業経営はなりたたなかったので馬を大切に扱ってきました。

どこの地区でも馬頭観世音が祭られていたものです。春の節句あたりを期して祭が行われ、数地区が持ち廻りで草競馬が行われたものです。馬場には優勝旗が林立しています。優勝旗を目指していざ出場。愛馬も馬上の人も、日頃の仕事とは勝手が違います。

スタートの旗が振られても後ずさりする馬や、横道にそれる馬があり、大さわぎでした。今は馬といえば、乗馬クラブか競馬場の馬ぐらいしか見られなくなりました。

23. 桜の下で野点ゆかしく

撮影：昭和32年 3 月



春の彼岸が過ぎると、間もなく桜の季節が巡ってきます。

あの頃は、戦後10年を経てようやく衣食住も安定のきざしをみせ、人の心にもゆとりが出てきた時代でした。この写真は、あるお茶の会の人達が、桃園山定輪寺の寺内をお借りして野点の会を催した時のものです。

石の階段を登ると、右手鐘つき堂の前に桜の老木がありました。たしかシダレ桜だったと思います。年代はわかりませんが老樹と思われる桜で枝もわずかに残っている程度でしたが、巡り来る春を忘れずに見事な花をつけてくれました。この桜花の下の野点はまことに風情ゆかしく心の和らぎを覚えています。この老桜樹も今はありません。

24. 俳 諧 の 道

撮影：昭和32年 4 月



今は俳句と言いますが、昔は俳諧、俳諧の道と言われていました。これは、俳句をよくする人達と、私達写真仲間が合同しての俳句の会で、写した写真を展示し、俳句の先生方がこの写真を見て俳句を作るものです。

今は故人となられた定輪寺37代住職・中村一雄大尚生をはじめ、そうそうたる俳句の師匠さん方が参加して俳句を作ってくれました。素人目にも一見して俳句の先生と呼ぶよりも、俳諧の師と呼んだ方が適切な風俗と言えるでしょう。こうした風俗も今では見られなくなりました。

25. お茶つみ

撮影：昭和35年5月



昔は、茶つみといえは手てつむものと限られていました。

カスリの着物に手甲脚絆、赤いタスキにスゲの笠、これが茶つみ女達の風俗でした。戦後はこうした風俗も変化を見、茶つみも機械化して、特殊茶以外はすべて機械つみになりました。

この写真は、手つみから鋏刈りになったころのものです。場所は富士農園の茶園ですが、茶つみの変化とともにその風情も消えてゆくような一抹のさみしさを覚えたものです。茶つみ唄が聞こえなくなり、唄の代わりに鋏の音では何となく味気なさを感じました。今は富士農園の茶園もなくなりました。

26. 葛山のモウソウ竹

撮影：昭和34年5月



竹といえば京都を連想しますが、裾野市の葛山地区には、すばらしい竹林がたくさんありました。タケノコの出る季節になると、商人が買い入れにやってきました。毎日タケノコを積んだトラックが何台も、葛山から出たものです。この写真は、葛山のある竹林で撮影したものです。力強くまっすぐ伸びたモウソウ竹と、はつらつとした娘さんの姿態が、いかにもマッチしていると思いませんか。企業が千福、葛山地区へ進出して開発に着手し、広大な地域を買収したため、葛山の竹林も買収面積の中に入り、かなりの面積が減少したと聞いていますが、まだまだ残っているものと思います。

27. 田植風景

撮影：昭和33年6月



田植の季節は猫の手も借りたい忙しさと言われ、朝に夕に星を頂き、というように、文字通り暗いうちから暗くなるまで働いてもなお、時間が足りない程の忙しさに耐えて田植の日を迎えたものでした。

田植のエイを組むと言い、女何人男衆何人が必要かを数え、田植に来てくれる人をお願いして田植をし、来てくれた人のところの田植に行き、エイを返すと言いました。

忙しい中にも、田植当日となれば農家のお祭り行事とも言われ、朝6時ごろ田植を始めて夕刻は2時か3時に終わり、そのあとはできる限りのごちそうをして、飲めや歌えの大盤振る舞いをしたものでした。

天気はよし……富士もよし……久根の里の田植風景です。

28. 山里の童たち

撮影：昭和33年 6月



私たちが子どものころは、だれもがはなをたらしていたものです。

もちろん当時はちり紙など持っていないから、着物のそでで横ぬぐいするから、そではピカピカに光っていたものです。

現代は食生活が豊かになり、子どもたちも体質が変わり、はなを出さなくなったと言われます。

この童たちではなを出している子はおりませんが、当時の山里の童たちの風俗をうかがい知ることが出来るほほえましい一場面です。見慣れない人がカメラをかまえたので、何をやるのだろうかと同様に疑惑の目でみつめているのを覚えています。

この童たちも今は社会の中堅となり、ちょうどこの年齢の子どもたちの親となっていることでしょう。

29. 高冷地の試験ほ場造成

撮影：昭和36年 7月



このころの農業園芸はあらゆる作目について促成栽培の方向に進んでいた。しかし温室に入れて加温しても、開花や結実をしないものがあった。これは加温以前にある期間、冷気にあてないと不可能であることが判明された。裾野市では「園芸のベルト方式」を試み、標高差と温度変化を利用することにより見事に成功した。

この写真は、標高1,450mの須山水ヶ塚の山上約50aを須山振興会から借り受けて試験ほ場を造成しているところだ。この試験地によって全国初のツツジの促成栽培に成功したのははじめ、イチゴの促成栽培や夏ギクの超促成など多くの栽培試験を成功させました。

30. 愛鷹山鋸岳の渡り

撮影：昭和30年 7月



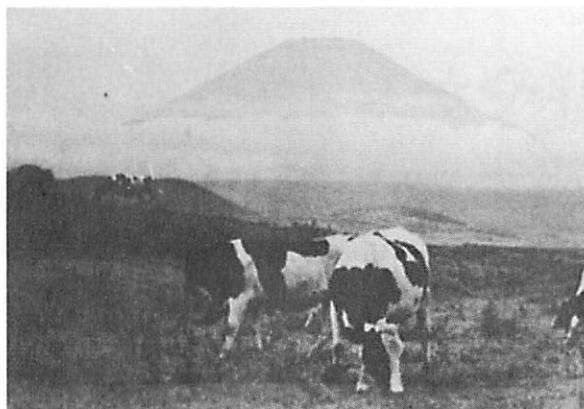
富士山よりずっと古く海中に噴出した火山で、何回となく爆発を繰り返して3,000m近い富士山型火山になった。

その後、頂上部が大爆発を起こし、現在の姿になったと言われる愛鷹山は、危険な岩場、深い原始林、長い裾野、非常に変化に富んだ山です。

最高峰の越前岳（1,505m）から呼子岳、鋸岳、位牌岳、袴腰岳、愛鷹山といくつかの峰が連なっている今なお奥深い山です。すでに何人もの遭難者をだした鋸岳の岩峰はもろい岩場で、越えて行くも巻いて行くも、楽観を許さない悪場であるから、愛鷹山を縦走する人は、十分に慎重を期して事故のないようにしましょう。

31. 真夏の山麓

撮影：昭和33年8月



下界の猛暑をよそに、ようやく雪も消えて黒富士の姿が見られます。今日も何百人、何千人の人たちが登山をしていることでしょう。この地は、今も健在で佐野に住まわれる鈴木翁が歌人若山牧水を案内して、終日足を運んだころの山麓と変わらぬ景観を残していることでしょう。

この日は、東京の知人と同行したのですが、「空気がおいしいですね。」と嘆声を残していました。終日雑踏と騒音に紛れた生活を送っている都会人にとっては、この自然の偉大さを、いつまでも忘れないことでしょう。

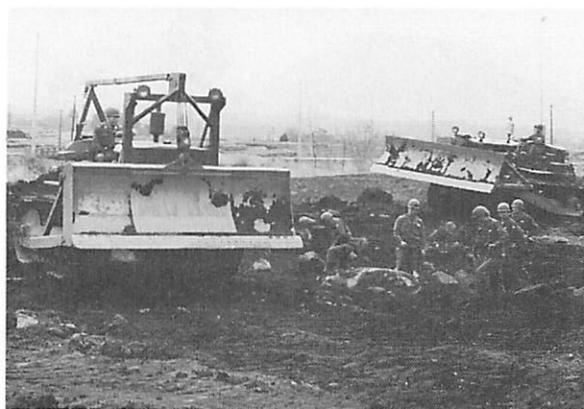
住みなれて、忘れかけた私たちにハッとさせます。

今日も下界は暑い一日となりそうです。

※鈴木翁（鈴木凌一氏）は、平成5月11月17日永眠されました。

32. プール用地の造成工事

撮影：昭和36年5月



当時の裾野町財政は予算規模も小さく、豊かな町とはいえなかったが、発展途上の自治体として整備しなければならない公共施設は目白押しに数えられていた。その一つ、町営プールの建設については、自衛隊の協力を仰ぐことによって建設費の軽減がはかられた。昭和36年5月ころ造成工事が始まり、7月14日、プール開きとともに完成式典が行われ、当日は、フジヤマのトビウオとしてオリンピックにその名を上げた小池礼三氏を迎え、模範泳法が行われて式典に花をそえてくれたものです。この写真は、縁の下の存在的造成工事に黙々として取り組んでくれた自衛隊員の働く姿です。

33. 白滝の舞

撮影：昭和31年9月



戦後10年、戦時中の悪夢を振り払うかのように市民の間に文化の波が高まってきた時代と言えるでしょう。これは沼津にある秋山バレエ研究所の方たちが、バレエを自然の中に溶けこませた踊りを演出しようと熱心にけいこをしている一場面です。

この場所がおわかりでしょうか。私たちが日ごろ見なれているせいか見過ごしてしまいがちですが、白滝です。（大畑橋すぐ上の白い瀬）自然を破壊から守り、後世により多く残すとともに、文化の創造は私たちに課せられた義務と言えるでしょう。

緑と文化の町裾野をますます飛躍させるようにしましょう。

34. 辛苦と汗の結晶

撮影：昭和29年9月



台風は2、3度やってきたがさしたる被害もなくまああまの稲作。今日は農業委員会の稲作作況調査が行われる日。

「おやじさん、どうだね今年のできは。」「うん、まあまあだね。」「ころばなかったから、とれそうだな。」「毎年ころばすんでな、今年はチッソをひかえ目にしたんで、このぶんじゃあなんとはいくべえ。」調査員と農家のおやじさんの会話が聞こえる。

やみ米時代のピークは去ったが、まだまだ食糧増産の時代、「今年の供出米はどのくらいになるかなあ、まあとれないよりもいいがな。」おやじさんの独り言が、辛苦を刻んだ額の深いしわ、がっしりしたキセルを持つ手にあんどが浮かぶ。

35. 竹ステッキ

撮影：昭和32年10月



戦前、戦時中、戦後と、長い年月続いてきた福島軽工業の竹ステッキ作りも、今は姿を消しました。竹の皮を取り、節を削り、まっすぐに伸ばし、えを曲げ、染色乾燥して仕上げる。当時は、裾野で唯一の輸出品でした。その用途については詳しく知りませんが、葬儀の参列者が持っていき、墓地に立てるとか聞いていました。

ステッキのほかに、昔のたばこは、朝日以外の巻たばこには吸い口がなかったので、竹パイプとキセルに使うラオが作られていました。竹パイプやラオは、戦後、たばこの変化に伴ってその姿を消していきました。

懐かしい工場の庭も、今日、パチンコ遊戯場の駐車場となっています。

36. 銀波輝く草原

撮影：昭和34年10月



十里木忠ちゃん牧場東北側あたりの小高い丘に立つと、東富士演習場のひょうびょうたる大草原が見渡される。

秋ともなれば、演習場立ち入り日を利用して、地元権利者がセンブリなどの葉草を採取して歩く姿があちらこちらに見受けられるが、それにも増して、銀色に輝く雄大な草原の穂波を見に訪れる都会からの家族連れが目につく。

見渡す限りススキの穂が、秋の日差しを受けて銀色に輝き、風になびく穂波はまさに銀波の寄せるごとくでまことに壮観な眺めです。

質素の中に愛くるしさを思わせるあのころの乙女、銀波の中に配するにふさわしく、懐かしい思い出の草原です。

37. 倒れた稲架

撮影：昭和33年10月



いまは、農作業も機械化が進み、稲刈り、脱穀もコンバインにより、ほ場で即時に行われるが、戦前は稲刈りといえば平干しに限られていた。戦時中あたりから掛干しを行うようになったが、これも大変労力のかかる作業でした。掛干し中に台風や強風が吹くと頭痛の種でした。

「見ろ、オンパクでロクな仕事をしないから、おまえらのやったところはみなひっくり返ってしまったぞ。早く行って起こしてこい。」親父によくどなられたものです。この掛干しのやり直し作業がまた大変でした。稲は雨にぬれて重いし、足は作り替えねばならないし…今は遠い思い出の一つで、見られぬ光景となりました。

38. ブナの原生林

撮影：昭和30年11月



「この木なんの木気になる木」、歌の文句ではないけれど、なんの木と思いますか。そう、ブナの原生林です。この地方でこのようなブナの原生林は他に見ることはできません。

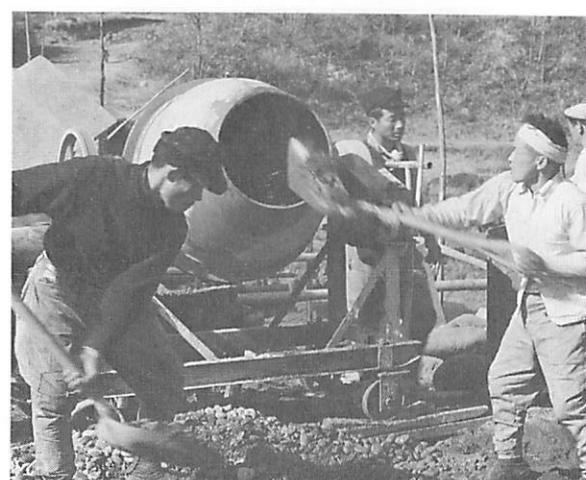
植物学上では、ブナの植生は十里木が南限と言われているので、学術的にも貴重な存在です。

この原生林は十里木にある頼朝の井戸の森で、幾年月の年輪を刻んだものか計り知ることもできません。

10数年も前に、県農業試験場の調査団と共に愛鷹山へアシタカツツジの調査に行ったとき、呼子峠あたりにはブナの老木がたくさん枯れているのを見ました。この森のブナはいつまでも健在であることを祈りたい。

39. 公共事業の労力奉仕

撮影：昭和33年11月



日進月歩、もう古い言葉になったようですが、すべての面で機械化が進み、肉体労働が減少しました。建設工事にあっても、コンクリートは電話一本で生コン車が工事現場に到着、直ちに打ち込み、高い所へは圧送車でコンクリートを送り打ち込む。人力では手元作業ということでした。戦後はようやく動力の練り機が登場した。手練り作業が動力化しただけでも大きな力となった。

この作業に従事している人たちは当時、模範農家中堅グループで、この作業は、部落内の公共事業に従事しているところでしょう。現在公共事業と言えば役所まかせですが、当時はこのように地元の人たちが力をあわせて工事を行ったものです。

40. 春を呼ぶ童たち

撮影：昭和32年12月



「お正月がきたならば こっばのようなもちを焼いて 赤いおべべにゲタはいて タコを揚げたり ハネついて ペッタンペッタン まりをつく」

今は昔、富士農園の茶園でこの童たちと会ったとき、私が子どものころよく母が歌ってくれた童唄を思い出していた。貧しい里の子ども心にかにお正月が待ちどおしかったことか。

この子どもたちの家庭は決して貧しいとは思えない、むしろ恵まれているのだろう。春を早くこいと呼んでいるような明るく無邪気な表情に、自分の子どものころを思い出しながら将来への力強ささえ感じたものです。

41. ま り つ き

撮影：昭和30年1月



戦前は別として、戦後の10年はあらゆる物資が不足していました。今は、お金さえ出せば何でも入手できる時代になりましたので、子どものおもちゃも高級なものがたくさん出回っていて驚くほどです。

昔は、お正月の子どもの遊びといえば、男の子はタコ揚げ、コマ回し、女の子は羽根つき、まりつき、男女あつまってカルタ取りや百人一首に夜の明けるのも忘れて興じたものですが、このごろでは、こうした遊びも珍しくなってきました。戦後まもない子どもたちは、質素な衣服を着て寒さにも負けず元気にわらべうたを歌いながらまりつきをしたものです。

42. 木炭を焼いたころ

撮影：昭和29年2月



戦前私たちの地区にも炭がまが2つほどありましたが、所有者は山持ちの旧家のもので、小作農家はこのかまを借用して炭を焼いたものです。もちろん私たち貧乏な農家では木炭を暖房用などには使用できません。養蚕をやったので、春蚕や晩秋蚕の時期には蚕室の暖房用に木炭が必要でした。戦後はタバコ栽培を始めたので、タバコは養蚕飼育の桑に弊害があったため養蚕をやめ、木炭もそれ程使用しなくなりましたが、正月用などに1かまくらい焼いたものです。

かまに火を入れるとだれかが火の番をしたものです。この娘さんどこのだれかって、ご想像にまかせましょう。多分50歳近くになっていることでしょう。

43. 梅花ほころびる頃

撮影：昭和30年2月



梅の花といえば、私たち年代の者は菅原道真の歌を思い浮かべます。

東風吹かばにほいおこせよ梅の花
あるじなしとて 春なわすれそ

この地方で梅といえば熱海の梅園が有名ですが、私も拾数年前に梅まつりに一度は行ってみようと友人と共に行ってみました。観光客が多く人波の中で花をめぐるなどという気分にはなれませんでした。

戦後、富沢や葛山に梅園が出来ました。しかしこれは個人の栽培梅園でしたので花見をやるわけにはゆきませんでした。

桜の花はらん漫、梅の花は清そ、この娘さんも梅の花におとらず清その感じの娘さんでした。

44. さつまいもの苗作り

撮影：昭和33年3月



甘しょ（さつまいも）は、この地方の特産物で、ことに愛鷹山ろくの富沢内野山地域で栽培されたさつまいもは品質がよく、主として関西方面に出荷されて最高値で取引され、広くその名を知られていました。

戦中、戦後の食糧難時代に至っては、さつまいもが米について重要な食糧となり、都会からは買い出しが押し付けてきたものです。

こうしたわけで、さつまいも栽培の重要ポイントは苗作りでした。苗床の作り方や、温度の関係になかなかの技術を要したものです。温度があがりすぎて種いもを全部くさらせてしまったなどの失敗がずい分とあったものです。

45. 黄瀬川のますつり解禁

撮影：昭和32年4月



戦後10年、このころは国民生活も敗戦のショックからようやく立ち直り、落ちつきを取りもどしてきた時代です。しかしまだまだ物資も乏しく生活に余裕ありませんでしたが、このような中で黄瀬川のマスつり解禁日は、おとなも子どもも楽しみに待っていた一日です。

昭和31年9月の豪雨により大畑橋は流出しましたが、まだ新しい架橋工事は始まっていません。仮橋の上下でつりを楽しんでいる人たちを見ると、現在のつり人たちに比較して服装も、つり道具も、いかにも質素だと思いませんか。

当時の世相をうかがえるような気がします。

46. 水ぬるむ頃

撮影：昭和29年4月



乙女の青春とは、こんなにも明るく、美しさに輝いていました。この頃は前後6年を経て、サンフランシスコ平和条約が成立し経済も立ち直りを見せ、ようやく平和の光が見えてきたときでした。

見合いをして婚約の話がきまり秋にはお嫁にゆくことになったと話していました。青春の日の何ものにもたえようのないよろこびの日々、全身の熱さを冷たい水でこころよくさませているかに見えました。

この年の4月1日を期して、泉村、小泉村が結婚(合併)をし裾野町となり光り輝く裾野市となる一歩をふみだしました。

この娘も、この年を生涯忘れることはないでしょう。

47. 桜の花咲く季節

撮影：昭和29年4月



ものいわぬ草木も、めぐり来る季節ごとに花を咲かせて人間社会に季節を教えてください。美しさを誇るかのように咲く華麗な花、よく見ないと見落としてしまいそうな道ばたに咲くかれんな花、花にもいろいろあるけれど、私達日本人にとっては桜の花が一番親しみやすいのではないのでしょうか。またこの季節が私達の気持ちを一番良く引き立ててくれるようです。桜の花と人とは古来より強いきずなで結ばれています。散りぎわを武士と結びつけた言葉や、人々の行動を戒めた言葉など数限りなくありますが、やはり桜の花の季節が来ると自然に心が浮き立つようです。またこの季節には色々な行事が催されます。この写真は野点の一角。

茶道の心得のない私にも風雅ゆかしきものとの味わいを楽しみました。

48. 苺露地栽培の当時

撮影：昭和29年5月



麦の穂が出ました。あと1か月たらずで収穫が始まります。そして忙しい田植えの季節がやってきます。苺の収穫は五月初めから麦の収穫までの短い期間に行われます。取りたての水々しい苺を出荷するために朝早く収穫します。おばさんも子どもも朝ごはん前にお手伝いです。苺の露地栽培がはじまったのは県東部では富士市に次いで裾野(当時小泉村)でした。堰原、水窪地区の先進農家によって栽培が始められました。

しかしあのころは、木箱に苺を一つ一つ升ベラを使って上手に箱詰めしないと輸送中に荷傷みがして売りものにならないので大変でした。富士山の高冷地育苗、ビニールトンネル栽培と裾野で開発し、栽培地は茶畑から久根、公文名と移行し今も少数ながら栽培されています。

49. 宗祇法師をしのぶ

撮影：昭和29年4月

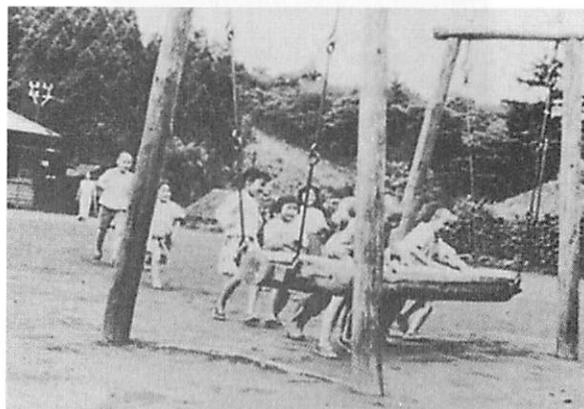


室町時代中期の連歌師宗祇は、「竹林抄」や「新撰菟玖波集」などの連歌撰集の編集をしたと言われ、この宗祇法師の墓が市内の桃園にあります。古老の方に聞いた話によると、桃園山定輪寺は現在の位置より西側の山ふところにあったといわれ、法師の墓はその定輪寺境内にあったものです。知人を介して竜沢寺のお坊さんに来裾していただき、法師の墓におまいりをしてくださるよう御願いしましたところ、心よく承諾してくれました。

名まえは忘れましたが、竜沢寺の内でも偉いお坊さん一行が7人で来てくれました。早春の墓参りの一日でした。いまは開発のため、この墓地も移転して現在の定輪寺境内にあります。

50. 懐かしい十里木分校

撮影：昭和33年6月



昭和29年に須山小学校は全焼し、中学校の一部も焼失したが、翌30年には須山小中学校新築校舎が落成した。本校は災難にあったが、ここ十里木は静かな平和に明け暮れていた。昭和32年には須山村が富岡村と共に裾野町へ合併したが、この頃の十里木はバスも通わない陸の孤島といわれていた。しかし、東海道が出来る以前は街道筋で仲々のにぎわいであったと古文書に記されている。

戸数15戸、全校生徒11人、十里木分校の姿でした。いまは分校の校舎もなく生徒は須山小中学校へバス通学をしています。人里はなれた十里木も今は、富士急の開発による別荘地、日本ランド遊園地、大昭和開発の別荘、ゴルフ場、富士サファリパーク等々大観光地としてにぎわいを見せています。

51. 田植の頃の幼な子

撮影：昭和31年6月



戦後の一時期は食糧難であったため、食糧の増産と米や麦、甘藷の供出などで農家は大変忙しい毎日であったけど、反面農業の花形時代でした。この頃の農家は忙しくても経済的に恵まれたので、働き甲斐がありました。私も戦後北支から引き揚げ者ですが、実家に身を寄せてしばらく農業をやりましたが、何を作っても庭先で売れた時代でした。戦前の農家はみじめでした。私の家などは水のみ百姓で、働いても働いても借金に追われていました。田植時期になると妹をオンブして学校へ行きました。小学校5年生の頃は、田植の時期中毎日縄張りをして手伝いをしたものです。この写真を見ていると、幼い頃が想い出されるのです。何かを訴え、大人に対して抗議したいようなそんな顔に見えます。